教材研究の基礎
――『大鏡』道長伝――

勝 倉 壽 一（国 文 学）

高等学校『国語II』の古典教材としてよく知られた作品に，『大鏡』道長伝の説話がある。
この説話は，「若き日の道長」（東京書籍）の「学習の手引き」に，
1．道隆・道兼・道長のそれぞれの行動を追って性格の相違を述べよ。
2．道長の人物像がよく書き表されている部分を文章に即して示せ。
また，「弓争い」（尚学図書）の「研究」に，
1．この文章では，道長をどのような人物として描こうとしているか。
2．この文章には，道長と道隆との関係がどのように描かれているか。また，関白殿が色青くなったのはなぜか。
など，道長の卓越した人間性，その剛気な性格に焦点をあてて，物語世界への理解を深めることを求めている。
このことは，多くの印象的な説話を連ねて，平安朝廷における道長の専権への道の合理的な解釈を語ろうとする『大鏡』作者の意図に沿うものであるが，その説話はいずれも当時の複雑な政治的状況と，熾烈な権力争いを背景に置いて語られているものである。上記のような学習課題は，当時の政治的状況と権力争いの歴史的事実を踏まえることにおいてはじめて解決することができる。
そのことはまた，歴史物語である『大鏡』の文学史上の位置について，正確な理解を与えるための必要条件でもある。
本稿は，古典教材である『大鏡』道長伝の説話の理解に資するために，教材研究にあたって踏まえるべき基礎的要件である当時の政治的状況と，権力争奪の様相を中心において作品解釈を行ったものである。
〔キーワード〕教材研究　歴史物語　大鏡

1．はじめに

『大鏡』第5巻「太政大臣道長上」の後半部は，青少年期の藤原道長の剛気な性格を語る3つの著名な説話を記している。即ち，藤原公任の多彩な才能の世評に対する羨望のあまり，父親の藤原兼家が道隆・道兼・道長3兄弟の前で公任の影を踏むことも出来ないであろうと慨嘆した時に，末弟である道長が影を踏まずに面を踏むと答えた話，花山帝の治政における五月雨の夜の3兄弟の肝試しの話，および道隆邸における道長と甥の藤原伊周の弓の競射の話である。

これらの話は，いずれも道長の栄華の必然性をその青少年期の逸話に遡って語ろうとしたものであり，道長の天賦の才質，特に2人の兄を圧倒するその剛気な性格を形象したものと解されている。道長説話は，帝紀，大臣列伝を語り終えた語り手が，満を持して道長の栄華の具体相を語ろうとしたものであり，その「御こゝろ魂のたけ」き人間性の形象のために青少年期の剛気説話を配したことは否定しえない。

ところで，私見によれば，面を踏むと放言した話は道長の15歳から18歳の間，肝試しの話は同じく20歳前後，競射の話は30歳前後の時期に相当する。また，これらの説話は，関白太政大臣・従一位藤原頼忠と正二位・右大臣兼家の熾烈な権力争いを経て，中関白家と道長の対立抗争に至る時期を背景に作られたものである。道長の栄華が，藤原氏の絶対権掌握への長い道のりと，その間に展開された権謀術数や酷烈な権力争いの帰結をなすものであることも見逃しえない。

これらの説話の解釈にあたっては，当時の政治的背景を踏まえておくことが是非とも必要である。

2．面を踏む

> 四条大納言のかく何事もすぐれ，めでたくおはしますを，大入道殿，「いかでかかゝらん。うらやましくもあるかな。わがこどもの，かげだにふむべくもあらぬこそ，くちおしけれ」と申させ給ければ，中関白殿・粟田殿などは，「げにさもとやおぼすらん」と，はづかしげなる御けしきにて，もものたまはぬに，この入道殿は，いとわかくおはします御身にて，「かげをばふまで，つらをやはふまぬ」とこそおほせられけれ。(1)

兼家が3人の子の前で慨嘆したとき，道長が影を踏まず面を踏むと言い放った話は，現在の学説では虚構であると理解されている(2)。兄兼通，関白頼忠との熾烈

な権力争いを展開し，花山院から帝位を奪った謀略家として知られる兼家の，意外な気弱い人間性を露呈しているかに見えるこの説話は，どのような意図のもとに構想されたのであろうか。道長の剛気な人間像を形象することを目的としたとする通説的な解釈はそれとして認められるが，この説話を政治的な背景を踏まえて見ると，また違った様相を呈することになる。

この兼家の慨嘆を歴史的な時間軸の中に据えて見れば，当面の対抗勢力である藤原頼忠がいまだ権力を有しており，兼家の権力が確立される以前，即ち兼家の雌伏・失意の時期がそれに当たるであろう。また，道長が「いとわかく」あった，その少年期を指すことも踏まえておかなければならない。

貞元2年（977）11月11日，関白職は時の関白藤原兼通から正二位・左大臣藤原頼忠に委譲され，兼通の弟で正三位・大納言の位にあった兼家は同日付けで「坐事停右大将」られ，民部卿に左遷された[3]。翌貞元3年6月，兼家は正三位・大納言に復し，10月には従二位・右大臣に昇進したが，同日頼忠は関白に太政大臣を兼ねることになり，その権力が確立される。2年後の天元3年(980) 3月，兼家は正二位に昇ったが，頼忠は翌年正月，従一位に昇り，人臣の位を極めることになる。

頼忠と兼家の権力が逆転したのは，寛和2年（986）6月23日，花山帝が退位して懐仁親王（一条帝）が即位したことに伴い，頼忠は「止関白随身等」められ，翌日，一条帝の外祖父である兼家が摂政の位に就いて氏長者になった時である。頼忠はなお太政大臣の位にあったが，兼家は7月に従一位に昇進し，さらに永祚3年（989）12月には頼忠の薨去に伴い太政大臣を兼ねることにより，権力が確定することになる。

この間の両者の争いは後宮においても見られる。天元元年(976) 4月，頼忠は女遵子を円融朝に入内させ，5月に遵子は女御となったが，兼家も同年8月に女詮子を入内させ，11月に詮子も女御になって対抗勢力をなしていた。

また，『栄花物語』巻第1「月の宴」，巻第2「花山たづぬる中納言」によれば，円融帝は安和の変の折に外威ではない関白太政大臣藤原実頼の輔佐によって即位したことから，その子である頼忠に好意を持っていた。天元3年(980) 6月，詮子は懐仁親王を生んだが，男性的でない帝は兼家に心を許そうとせず，兼家も帝を優柔不断な方として親しみを持たなかった。女御詮子が懐妊した折，頼忠は娘の女御遵子の立后のために奔走し，天元5年（982）3月，円融帝と頼忠が心を合わせて遵子の立后をはかった。これに対して兼家一門は門を閉ざして公の儀式への出仕を拒否し，女御詮子も親王とともに入内を拒んで対立した。このような兼家の強引な抵抗に屈伏した円融帝は，永観2年（984）8月27日，詮子所生の懐仁親王の立太子の処置を取って退位し，位を花山帝に譲ることになる。

一方，兼家の慨嘆説話を，頼忠の子である藤原公任の存在が宮廷社会で注目された時期として見ると，次のようになる。

天元3年（980）2月，公任は正五位下・侍従に叙せられ，昇殿を許された。15歳であった。この年，道長は正月に従五位下に叙せられていたが，昇殿を許されたのは5月，侍従に叙せられたのは天元6年（983）正月，18歳の時である。公任は天元4年（982）正月には従四位下に叙せられ，道長が侍従に叙せられた天元5年の5月には従四位上に昇進，翌天元6年正月には讃岐守を兼ね，12月には左近衛権中将に任ぜられている。同年生まれの両者が，父親の頼忠と兼家の争いを引き継ぐ形で強烈な対抗意識を抱いたであろうことは，容易に推測しうる。

「頼忠伝」によれば，天元5年の遵子立后の折，兼家の女詮子には皇子懐仁親王があったが，公任は得意のあまり兼家邸を覗いて「この女御（詮子）は，いつか后にはたち給らん」と放言し，兼家一族の憤激を招いたことが記されている。

このように見てくれば，この説話の政治的背景として，頼忠の勢威が兼家を圧倒していた時期，公任の存在が宮廷社会で注目された時期に相当する天元3年（980）から永観元年（983）の間，公任・道長の15歳から18歳の間が想定されるのである。

それでは，兼家は何故に子供たちの前で慨嘆したのであろうか。この説話が，兼家によって公任と道隆・道兼・道長3兄弟が対比され，次いで道隆・道兼と道長を対比する形を取ることにより，「公任を圧倒する道長の卓越ぶり」を語る「鮮やかな道長の豪胆像の彫り上げ」がなされている[4]ことは認められる。しかしまた，そこに政治的な意図を読み取るとすれば，この慨嘆が頼忠一族と対抗しうる後継者の品定めという性格を有していたことに思い当たるはずである。

公任が18歳で従四位上・兼讃岐守・左近衛権中将に昇進した永観元年，道隆は31歳で正四位下・右中将・兼備中権守に止まっており，道兼は23歳で無位の弾正少弼に過ぎず，従五位下蔵人に叙任されるのは翌年のことである。道隆以下3兄弟は事実上公任に圧倒されており，公任の多才の評判を聞くにつけ，兼家がわが子らの凡庸さと比べて「うらやましくもあるかな。わがこどもの，かげだにふむべくもあらぬこそ，くちおしけれ。」と慨嘆したのも無理からぬことであった。

また，兼家の酷評が道長の反発心を呼び起こしたことも注目しておいてよい。兼家の慨嘆に対して，道隆・道兼は「『げにさもとやおぼすらん』と，はづかしげなる御けしきにて，ものものたまは」なかったという。父親から公任との政治家としての資質の差異を指摘され，無言で恐懼した道隆・道兼は，名門九条流の後継者の資格を問われたことになる。道長の示した傍若無人な言葉と，公任に対する強烈な対抗意識は，あらゆ

る権威に拝跪しない，権力者たるべき者の資質を示したものであった。

藤原氏の歴史は，皇位の継承に関わる他氏排斥から同族間の対立抗争を継続的なエネルギーとして権力の掌握をはかってきたのであり，頼忠と兼家の争いもその具体的な事実に外ならない。対抗勢力の後からその影を踏むのではなく，正面から面目を踏み潰すという道長の傲岸な放言が，兼家の期待する後継者像に外ならなかったことは，その後の道長の栄進を見れば明瞭である。

言わば，この説話は九条流兼家と小野宮流頼忠の争いを背景として，他氏排斥による権力掌握の気概を語るものであったと見ることが出来る。

3．肝試し説話

さるべき人は，とうより御こゝろ魂のたけく，御まもりもこはきなめりとおぼえはべるは。花山の院の御時に，五月しもつやみに，さみだれもすぎて，いとおどろおどろしくかきたれ雨のふる夜，みかど，さうざうしとやおぼしめしけん，殿上にいでさせおはしまして，あそびおはしましけるに，人々ものがたり申などしたまうて，むかしおそろしかりけることゞもなどに申なり給へるに，「こよひこそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに，けしきおぼゆ。まして，ものはなれたるところなど，いかならん。さあらんところに，ひとりいなんや」とおほせられけるに，「えまからじ」とのみ申給けるを，入道殿は，「いづくなりとも，まかりなん」と申給ければ，さるところおはしますみかどにて，「いとけうあることなり。（さらば）いけ。道隆は豊楽院，道兼は仁寿殿の塗籠，道長は大極殿へいけ」とおほせられければ，よその君たちは，「びんなき事をもそうしてけるかな」とおもふ。又，うけ給はらせたまへる殿ばらは，御けしきかはりて，「やくなし」とおぼしたるに，（入道殿は）つゆさる御けしきもなくて，「わたくしの従者をばぐし候はじ。この陣の吉上まれ，滝口まれ，一人を『昭慶門までをくれ』とおほせごとたべ。それより内には，ひとりいりはべらん」と申給へば，「証なきこと」ゝおほせらるゝに，げにとて，御てばこにをかせたまへる（小）刀まして，たちたまひぬ。いま二所も，にがむにがむ各おはさふじぬ。「子四」と奏してかくおほせられ議するほどに，うしにもなりにけん。「道隆は，右衛門陣よりいでよ。道長は，承明門よりいでよ」と，それをさへわかたせたまへば，しかおはしましあへるに，中関白殿，陣まで念じておはしましたるに，宴の松原のほどに，そのものともなきこゑどものきこゆるに，術なくて，かへりたまふ。粟田殿は，露台のとまで，わなゝくわなゝくおはしたるに，仁寿殿の砌のほどに，のきとひとしき人のあるやうにみえたまひければ，ものもおぼえで，「身の候はゞこそ，おほせごともうけたまはらめ」とて，をのをのたちかへりまいりたまへば，御あふぎをたゝきてわらはせ給に，入道殿は，いとひさしくみえさせ給はぬを，「いかゞ」とおぼしめすほどにぞ，いとさりげなく，ことにもあらずげにて，まいらせたまへる。「いかにいかに」ととはせ給へば，いとのどやかに，御刀に，けづられたるものをとりぐしてたてまつらせ給に，「こはなにぞ」とおほせらるれば，「たゞにてかへりまいりてはべらんは，証候まじきにより，高御座のみなみおもてのはしらのもとをけづりて候なり」と，つれなく申たまふに，いとあさましくおぼしめさる。こと殿達の御けしきは，いかにも猶なほらで，この殿のかく（て）まいりたまへるを，みかどよりはじめ感じのゝしられたまへど，うらやましきにや，又いかなるにか，ものもいはでぞ候給ける。なをうたがはしくおぼしめされければ，つとめて，「蔵人して，けづりくづをつがはしてみよ」とおほせごとありければ，もていきて，をしつけてみたうびけるに，つゆたがはざりけり。そのけづりあとは，いとけざやかにてはべめり。すゑのよにも，みる人は猶あさましきことにぞ申しかし。

この著名な五月雨の夜の肝試し説話も虚構であるとされている。[5]

この説話の構想について考えるとき，まず，この話が花山院の在位中の逸話として語られていることに注目しておく必要がある。

花山帝の在位期間は，永観２年（984）８月28日の即位から，寛和２年（986）６月2日の退位に至る１年９ヵ月で，帝の17歳から19歳の間の出来事ということになる。しかも，寛和元年（985）７月に寵愛していた女御藤原忯子の薨御に逢い，以後退位までの期間は悲嘆にくれていたから，肝試し説話の歴史的背景としては忯子の死に先立つ寛和元年５月が相応しい。[6]

この年，道隆は33歳で，従三位・右中将に春宮権太夫を兼ねており，道兼は25歳で正五位下・蔵人に左少辨を兼ねていた。また，道長は20歳で従五位下・右兵衛権佐の任にあった時の話ということになる。[7]

従来，この説話は道隆・道兼の臆病さと対比された道長の豪胆な人間性を語るものであると理解されてきた。闇夜の奇怪な物音や巨大な人影に脅えて途中から引き返した道隆・道兼と，平然として太極殿に向かい，証拠に高御座の柱を削って戻った道長の沈着冷静な行為の対照性は際だっている。

しかし，花山朝の政界を踏まえて見れば，説話の様相は異なってくる。

花山朝では，故摂政藤原伊尹の女懐子所生の帝を擁する義懐（伊尹の男）が外戚として勢威を振るってお

り，兼家には花山朝に取り入る手立てはなかった。義懐が兼通の異母弟である藤原為光一族と姻戚関係を結んだのも，兼家に対抗するためであったと考えられる。

花山帝は為光の女忯子を寵愛していたが，その後宮には，兼通の二男である朝光の女姫子，関白太政大臣頼忠の女諟子，為平親王の女婉子が相ついで入内し，妍を競っていた。寛和元年７月の忯子の死に悲嘆にくれる花山帝と，女忯子を失って夢破れ，力を失った為光の隙に乗じて，兼家一門は周到に用意を整え，花山帝を出家に追い込むのである。言わば，花山朝の１年９ヵ月は，兼家一門にとっては東宮懐仁と居貞親王を擁して権力掌握の機会を窺う，雌伏の時期であった。

この説話は，５月下旬の豪雨の夜，花山帝を中心とする近侍の公家らの妖怪談が高じて肝試しに発展したが，その座に居わせた公家らが尻込みする中で，道長が名乗りをあげたために，道隆・道兼も巻き添えにされた経緯から語られている。道長の突然の言動に道隆・道兼は「やくなし」と感じる。藤原３兄弟が突然花山帝をはじめ，その側近の公家らの好奇の視線を集めたことへの当惑が作用していたであろう。臆病・小心な道隆・道兼の振舞いを戯画的・誇張的に描いたこの説話は，一面で，東宮を擁する兼家一族が花山朝においては異質分子であり，事あらば嘲笑の対象になりかねない微妙な位相を語るものでもあった。「びんなき事をもそうしてけるかな」という公家の反応は，道隆らに好意を寄せる同情の視線の存在も示唆している。

しかし，道長はそれらの思惑を一蹴する。従五位下・右兵衛権佐というその座の末席にあった道長にとって，帝の命による肝試しこそは，自己顕示の絶好の機会であった。生来の剛気な性格と，20歳の怖いもの知らずの客気が作用したとも言えよう。３兄弟の中にあっても，名門九条流の嫡男として東宮懐仁を擁する道隆，蔵人として帝に近侍する道兼に対して，道長が宮廷社会にその存在を印象づける機会は，その胆力の誇示しかなかったのである。

ところで，大極殿の高御座の南の柱を削ったことには，いかなる意味があったのか。高御座は帝の即位や朝賀の大儀，国賓の引見などに用いる玉座であり，古代から帝の権威を象徴するものであったことは，次の用例に明瞭である。

- 『万葉集』巻18・4089・大伴家持
  高御座　天の日嗣と　天皇の　神の命の　聞し食す　國のまほらに……
- 同・4098・同
  高御座　天の日嗣と　天の下　知らしめしける　皇祖の神の命の……
- 祝詞「大殿祭」
  高天の原に神留ります，皇親神ろき・神ろみの命もちて，皇御孫の命を天つ高御座に坐せて，天の璽の劔・鏡を捧げ持ちたまひて，……

高御座の柱を削るというのは，帝位をものともしない，やがての絶対権力への野望を暗示するものであろう。花山帝を支える外戚，側近の公家への不敵な挑戦であり，その胆力に屈した花山帝，外戚たちは，右兵衛権佐という卑官にすぎない若者の胆力にたじろぎ，その不敬の行為を処分しえないのである。「こゝろ魂のたけく」とは，肝試しの胆力だけではなく，帝・側近の高位の公家たちを圧倒する気迫を言うのであろう。昇殿者の末席にある若者が帝を圧倒し，注目を集めた事件であり，道長が公の場に頭角をあらわす機会でもあった。第１の説話が，父親の兼家に対して３兄弟の末弟である道長が後継者たる資質を認めさせた説話であったのに対し，この説話は道長が宮廷社会において自らの存在を顕示した説話という性格を持っている。

語り手は，高御座の南の柱を削った道長の行為を「すゑのよにも，みる人は猶あさましきことにぞ申しかし。」と述べている。この「あさまし」は通常の理解や判断を超えた事象を指す言葉であり，道長の栄華の現実を踏まえたうえで，若年の道長の傲岸不羈な行為の跡に接して，その栄華の必然的であったことを追認する構図をなしている。

４．弓の競射説話

この説話の史実性の有無についても，虚構性が強いと解されてきた。[8]それではなぜこのような説話を作る必要があったのか。

この説話を語るにあたって，作者はその時期的条件について「世間のひかりにておはします殿の，一年ばかり，ものをやすからずおぼしめしたりしよ」と記して，道長の不遇時代の逸話であると述べている。その道長の不遇の事実は，説話中に道長が伊周より「下臈」であった時期のことであると明示されている。

正暦５年（994）８月，道隆の長子伊周は21歳で内大臣になり，従二位・権大納言であった29歳の叔父道長を越えている。翌長徳元年（995）３月には伊周が父道隆に代わって関白を代行することになり，10ヵ月にわたって道長は伊周の下位についていたことになる。その間，道長は「おほやけざまの公事作法ばかりには，あるべきほどにふるまひ，ときたがふことなくつとめさせ給て，うちうちには，ところもをきゝこえさせたまはざりし」という。朝廷の政務や儀式においては下位の身分相応に振舞ったが，私生活においては鋭い対立姿勢を示していたことが推測される。この説話はその具体例の意味を担うものであったと思われる。

帥殿の南院にて，人々あつめてゆみあそばしゝに，この殿わたらせたまへれば，「おもひがけず，あやし」と，中関白殿おぼしおどろきて，いみじう饗応しまうさせたまふて，下臈におはしませど，まへにたてたてまつりて，まづいさせたてまつらせ給けるに，帥殿ゝやかずいま二おとり給ぬ。中関

白殿，又御前に候人々も，「いま二度のべさせ給へ」と申て，のべさせ給けるを，やすからずおぼしなりて，「さらば，のべさせ給へ」とおほせられて，又いさせ給とて，おほせらるゝやう，「道長がいへよりみかど・ささきたちたまふべきものならば，このやあたれ」とおほせらるゝに，おなじものを中心にはあたるものかは。つぎにぞ帥殿いたまふに，いみじうおくしたまひて，御てもわなゝくけにや，的のあたりにだにちかくよらず，無辺世界をいたまへるに，関白殿いろあをくなりぬ。又入道殿（道長）いたまふとて，「摂政・関白すべきものならば，この矢あたれ」とおほせらるゝに，はじめのおなじやうに，的のやぶるばかり，おなじところにいさせたまひつ。饗応しもてはやしきこえさせたまひつるけうもさめて，ことにがうなりぬ。ちゝおとゞ，帥殿に，「なにかいる。ないそないそ」とせいし給て，ことさめにけり。

伊周が父道隆の邸で人々を招いて弓の競射の会を催したとき，そこへ突然道長が乗り込んで来る。驚いた道隆は慌てて道長の機嫌を取る。ことは，伊周方が道長を無視したか，取り巻きの公家のみを招いたことに腹を立てた道長が，その事を知ったうえで乗り込んだというのであろう。伊周の官位を道長より上位に据えたことに後ろめたさを感じていた道隆は，慌てて「いみじう饗応」する。

最初の弓の競射は道長が2本勝つ。その場は，伊周が叔父である道長に勝ちを譲り，道長の日常的な不満を和らげる配慮が必要であったが，道隆とその取り巻きの公家たちは「いま二度」と要求する。2本差がありながらさらに2度射るということは，先に射る道長が2本外して伊周が2本当てることによる引き分け扱いの要求を意味する。そのことを含みとした暗黙の圧力であったと解される。[9]伊周は内大臣，道長は権大納言であり，伊周の体面を保つための身分に相応しい結果を求めたものであった。

道長は心中穏やかでなく，激しい対抗心を露にする。朝廷における兄道隆の薄遇への不満や憤りが，競射の会における無視の態度，さらに重ねての無理押しと暗黙の圧力を契機に，ついに爆発する。2つの言挙げは，中関白家への公然たる挑戦を示すものであり，その結果は関白道隆・内大臣伊周の権威を失墜させるとともに，取り巻きの公家たちに中関白家に対する対抗勢力としての道長の存在を誇示する効果をもたらすことになった。

「道長がいへよりみかど・ささきたちたまふべきものならば，このやあたれ」という第1の言挙げは，5年前の正暦元年（990）1月に入内した定子にいまだ皇子出産を見ない道隆の心を動揺させる宣言であった。こののち，長保元年（999）11月，定子は敦康親王を出産したが，道隆は既に同年4月に死去しており，道長は11月に女彰子の入内をはかり，やがてその腹から敦成（のちの後一条帝），敦良（のちの後朱雀帝）の2皇子が生まれることにより，2代の帝の外祖父として絶対権力を振るうことになる。

また，「摂政・関白すべきものならば，この矢あたれ」という言挙げは，道隆から伊周へという関白移譲の既定の路線に真向から挑戦する意志を示したものである。翌年の道隆，道兼の死去と東三条院の後押しにより，道長は関白に就き，伊周方を迫害しつつ絶対権を手中にすることになる。

ところで，道隆らが求めた「いま二度」の弓射について，関根正直の『大鏡新註』（大正15）は

仮令ば，矢二本を一手といふ。さて，勝負を競ひしに，伊周二矢ながら負けしかば，猶二手延べて，あと四本の勝負と約し，其の間に先の二本を取り返し，勝の数をも得させんと，伊周の近侍のたばかり勧めたるなるべし。

と説いており，諸注釈もこれを踏まえている。[10]権大納言の位にあった30歳前後の道長が，兄の関白道隆の邸宅において，道隆とその取り巻きの公家の前で公然と権力の奪取を宣言するというこの説話は，勝負を覆そうとする中関白家側の悪意を込めた圧力に対する強烈な反発を語ったものであると読むことが妥当であるかもしれない。

この説話の背景をなす歴史的事実を踏まえて見れば，事は2人の弓射の能力の問題などではなかった。関白・内大臣父子と権大納言の政治的な対立，妥協のありえない決定的な争いを暗示するものであり，翌年の道隆の死去に伴う関白職をめぐる2人の骨肉相食む争いの前哨戦という性格を持つものであった。道長の剛気と伊周の「みどりごのやうなる」人物像を対比的に描いたこの説話は，熾烈な政治的争闘を踏まえて読むならば，中関白家と道長の宿命的な対立と，中関白家の政治的な敗北の必然性を象徴的に語るものであったと考えられるのである。

なお，この競射の時期について，これを道長が「左京太夫」であった時のことであるとする本文が存在する。

入道殿やもどして，やがていでさせ給ぬ。そのおりは左京太夫とぞ申し，ゆみをいみじくいさせ給しなり。又いみじくこのませ給しなり。[11]

道長の左京太夫在任は，永延元年（987）9月から4ヵ月間，22，3歳の頃にあたり，従三位の位にあった。これに対して伊周は14，5歳で正四位下蔵人の少将の地位にあり，道長が「下臈」であったとは言えない。しかも，8歳の年令差を考えれば道長の勝利は当然であり，敗北すればむしろ恥辱ともなる。[12]

道長が強弓を引き，弓を好んだという説明的な記述は，説話を矮小化し，歴史的な背景を希薄化させてしまっている。22，3歳の精力旺盛な青年期にある叔父道長が，14，5歳のひよわな少年である甥の伊周に自

慢の腕前を見せつけて威圧し，摂関の位の奪取を宣告するという内容になり，読者にむしろ客気にはやる道長の軽薄性を印象づけることになる。道長が22，3歳の頃，35，6歳であった道隆が弟の挑戦に警戒心を募らせ，中関白一族の基盤固めに腐心するのはむしろ当然であり，道長が不遇であったというのも，自らの軽薄な言動が招来したものであることを意味することになる。道長の「左京太夫」在任時の逸話であるとする記載は，先学の説かれるように「後人のさかしら」と見るべきものであろう。(13)

〔注〕

(1) 本文の引用は日本古典文学大系『大鏡』の東松本による。なお，横書きのため，くり返し記号の部分は2度書きにした。

(2) 保坂弘司著『大鏡全評釈・下巻』(昭和54，学燈社) 267頁。

(3) 『公卿補任』による。『大鏡』の古活字本・萩野本，及び『栄花物語』は「治部卿」に遷されたと記している。

(4) 保坂弘司著『大鏡研究序説』(昭54，講談社) 173頁。

(5) 橘純一著『大鏡新講』(昭和29，武蔵野書院) 435頁。

(6) 松本治久著『大鏡の主題と構想』(昭和54，笠間書院) 187頁。

(7) 従来，肝試し会の時の3兄弟の年令・身分については，
道隆　32歳～33歳　三位中将
道兼　24歳～35歳　頭の中将
道長　19歳～20歳　五位の蔵人
とされているが，『公卿補任』によれば，道兼の頭の中将任官，道長の蔵人任官は，花山院の譲位後のことである。

(8) (2)に同じ。293頁。

(9) 渡辺実著『大鏡の人々』(中公新書，昭和62) 186頁。

(10) 日本古典文学大系『大鏡』222頁頭注。『大鏡全評釈・下巻』289頁。

(11) 増補本系統の古活字本，異本系統の萩野本（根本敬三編『対校大鏡』昭和59，笠間書院)。適宜に濁点・句読点を付した。

(12) 塚原鉄雄著『王朝の文学と方法』(昭和46，風間書房) 143頁参照。

(13) (4)に同じ。176頁。